

先輩インターンの活躍について

| | | | | | |
|-------------------|---|---------|--------|----------|------|
| 派遣年度 | 2014 | インターン番号 | KB2014 | タイプ | 公募型 |
| 派遣国 | スリランカ民主社会主義共和国 | | | 派遣都市 | コロンボ |
| 受入機関 | Japan Sri Lanka Technical and Culture Association (JASTECA) | | | | |
| 受入機関概要 (事業内容等) | HIDA研修生の同窓会であり、スリランカで人的資本の開発と技術の伝承を行っている。 | | | | |
| 派遣期間 | 2014年12月01日 ~ 2015年2月26日 | | | | |
| 現在の所属先 | 東京大学 | | 当時の所属先 | 東京大学 | |
| 現在の所属部署 | 実践政策学コース | | 所在地 | 実践政策学コース | |
| 区分 | 学生 | | 性別 | 男性 | |

1. インターンシップに参加されたきっかけや動機についてお聞かせください。

1. 教育政策(特に高等教育政策)に興味があり、日本のみならず、他国のことも深く知ること、複合的に考えられるようになりたかったから。特に、発展途上国の政策形成の現場を見たかったから。
2. 英語を用い、異文化の人とコミュニケーションをとり、お互いの意図を理解しあいながら、物事を前に進めていく経験をするのは、今後の人生に役立つスキルになると思っていたから。

2. インターンシップではどのようなことをされましたか。

1. スリランカ高等教育省や各地の大学におもむき、スリランカの高等教育の現状を調べ、レポートを書くこと。それを通して、現場の授業から政策的課題を発見することを目指していた。
2. その他、スリランカという国を理解するために、紅茶工場の見学、陶器工場の見学などを行い、ビジネスモデルも理解することで、スリランカの経済構造についても理解を深めた。

3. インターンシップに参加して達成できたこと、参加して良かったことは何でしょうか。

1. 大きく文化が異なり、まったく期待もされておらず、まったく信頼もなく、まったく知識もない状態、つまり完全に真っ白の状況から、コミュニケーションを積み重ねることで、課題を発見し、自分が役立てることを見つけ、徐々に融け込んでいく経験ができたことは、日本では決して学ぶことができないことであったと思う。
2. 自国ではないからこそ、政治・経済・文化・教育と多角的に、そして客観的に観察することができた。様々な場面で知った情報が、少しずつスリランカの知られざる姿を映し出していく過程を体感できたのはとても幸せなものであった。ここまで一国を俯瞰して、かつ集中的にみることはこの経験がなければ、恐らくなかったらと思う。

インターンシップ風景



キャラニア大学で大学院生と



ルフナ大学での講義

4 インターンシップの経験は、その後どう活きましたか。具体的なエピソードを交えて教えてください。

1. 現在、国際機関が行っている教育のプロジェクトで働いているが、そこで、まったく一から周囲に溶け込みながら進めていくスキルが大きく役立っている。日本とスリランカで大きな違いはあるものの、いったい、誰とコミュニケーションをとって、どういった形で何を頼むかという基本的な着眼点は変わらず、自動的に何をすればいいかが見えるというのは、プロジェクトそのものに集中できるということもあり、非常に身になっている。スリランカでも、何度もコミュニケーション不足のために煮え湯を飲まされる経験をしたが、その経験が、一つひとつ丁寧に確認すること、まず最初に誰に話を持っていけばいいかということなど、多くの点で今の僕を助けてくれていると思う。
2. 卒業論文(教育政策を題材にしています)をはじめとして、政策を考えるときに、複合的な視点で見ることができるようになった。スリランカでは、ほんとうにたくさんの方にお世話になった。ときには、スリランカでも有数の実業家であったり、ときには、スリランカで有数の文筆家であったり、ときには、スリランカの大学の学長であったり、省庁の官僚の方であったり。経済に携わっている方から、政治、教育に至るまで、多くの人と話をしたことで、多様なスリランカ像を知ることができた。これは、このインターンシップでなければ不可能だったと思う。駐在員としてスリランカにいれば専ら経済の観点から、大学教授としてだったら大学からということになるだろうからである。そういう意味で、様々な立場を縦横無尽に駆け抜けられたことは、非常によい経験だった。このように多角的な視点を体得したことで、教育政策の分析といったときにも、労働市場はどうか、知識人階層は社会でどのような役割を果たしているか… など多様な論点を考えることができる。
3. 海外に友人ができることで、世界がもっと身近になった。様々な大学を訪問し、そこで多くの友だちができた。インターネットを介して今でもそれらの友だちとは繋がりがあり、スリランカの状況がリアルタイムでわかる。シンハラ語をそこまで使えるようにならなかったのが、断片的な情報に留まっているものの、それでも日本で日々スリランカの情報に触れることは、様々なことを日々相対化し、海の向こうのことに思いを馳せるために、よいきっかけになっている。
4. スリランカでは、多くの人々が、国のことを考え、故郷のことを考え、家族のことを考えていた。そして、出逢った多くのスリランカ人は、かつて日本で御世話になった人のことを常に考えていた。そのおかげで、恩返しという形で、僕はほんとうにスリランカでよくしてもらった。これは、僕もスリランカに恩返しをしなければならぬということだと思うし、同じく、日本でスリランカをはじめとする諸外国の人に技術を教え、有効の礎を築いた先人に感謝しなければならぬということだと思う。だから、自分がそのような存在にならなければならないと身が引きしめる思いである。

5. 最後に、インターンシップへの参加を検討している人たちへメッセージをお願いします。

確かに、その気になれば日本でも色々な経験を積むことができます。しかし、海外に出ることで、日本で普段自分がいる環境が、いかに「過保護」なものなのか気付くことができます。すべてが自分の責任で、すべてが自分次第で、真っ白なところから始められる経験をぜひ一度は味わってみてください。「過保護」な環境を飛び出して、自分の足で立つ経験を一度でいいからしてみてください。そのとき、世界の見え方も、自分の人生に対する考え方も、大きく変わってくるかもしれません。皆さんが実りあるインターンシップを送ることができるよう、心からお祈り申し上げます！

現在の活躍の様子



来日したJASTICAメンバーと



教育プログラムのファシリテーター